PRESS RELEASE

2021年4月14日（水）
滋賀県立美術館
TEL:077(543)2111
mail：museum@pref.shiga.lg.jp
担当：福山・木村

滋賀県立美術館 6月27日オープン！

photo Rinko Kawauchi

ミッションステートメント
（使命と行動指針）

「かわる、かかわるミュージアム」としてのミッションステートメント

私たち滋賀県立美術館は、1984年に滋賀県立近代美術館として開館しました。
収蔵点数は2020年3月現在で1,786件と県立の美術館としては比較的小さい規模ではありますが、日本画家の小倉遊亀や染織家の志村ふくみのコレクションは国内随一を誇っています。また、マーク・ロスコやロバート・ラウシェンバーグなど、いわゆる戦後アメリカ美術を代表する作家の良作を収蔵していることでも知られていますし、2016年からは、アール・ブリュットの作品の収集もスタートさせました。教育普及活動でも、開館当初から実施しているワークショップやアートゲームを用いた鑑賞教育などの先進的な取り組みは、全国に誇れるものです。
改修工事のための一時休館を経て、2021年6 月に再開館するにあたり、私たちは「かわる、かかわる」をコンセプトに歩みだします。まず、私たちは時代や傾向を限定することになる「近代」を、館名から外します。今日の美術館のミッションは、「人がつくった様々なものに触れることを通じて、社会や環境の多様性をより深く感じられる場をつくること」にあると考えるからです。滋賀県立美術館は、そのミッションを実践していくために以下のことを行っていきます。

（次頁に続く）

創造（Creation）と問いかけ（Ask）

滋賀を中心にして、障害のあるなしに関係なく、また、ジェンダーバランスにも留意しながら、創造の場を支えます。その上で、「アートって、人間にとってなんなんだろうか」という問いを考えたくなるような展示を実施するとともに、これまで以上にユニークなコレクションをつくりあげていきます。

地域（Local）と学び（Learning）

「滋賀っておもしろい！」と皆が言いたくなるように、県内の個人や企業・団体の協力を得ながら、地域の多様な魅力をリサーチして広く発信します。また、県民を中心に、子どもから大人まで、ビギナーから学者まで、ユニバーサルの理念のもとに、一人ひとりの学びに貢献するプログラムを実施します。

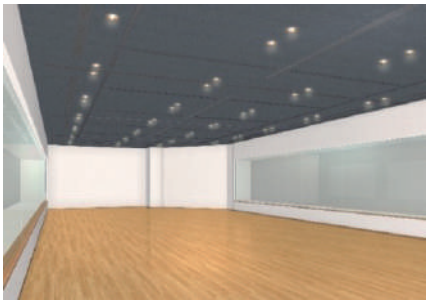
これら「創造（Creation）」「問いかけ（Ask）」「地域（Local）「学び（Learning）」の４つ（CALL）を軸にすることで、滋賀県立美術館は、これからますます変動していく社会に対しても、柔軟にかわりながらかかわり続けることができるはずです。そして、この「つねにフレッシュなミュージアム」というモデルを滋賀から発信し、今後の展開へと結びつけたいと考えています。

改修工事の概要紹介

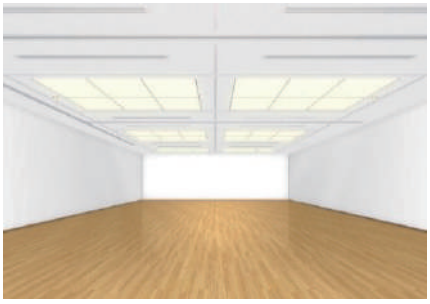
昭和59年（1984年）の開館以来約35年が経過し、施設設備の経年劣化により、特に安全対策や展示環境、来館者の利便性等の面で、現代の美術館に求められる水準に向上させる必要があることから、それらに対応する施設・設備の改修工事等の整備を行いました。

1 作品の魅力をより楽しめる

・各展示室内装（床（カーペット→フローリング）・天井・壁面）の張替
・作品を守り演出効果の高いＬＥＤ照明の導入
・快適な鑑賞のための壁面ガラスケースの低反射施工
・ギャラリーの展示壁クロス張替とスポットライト導入



展示室1
主に日本画や工芸などの展示を行う



展示室2
主に現代美術の展示を行う

展示室3
多様なテーマやジャンルの展示に対応

2 みんなにやさしく使いやすい

・各トイレの全面改修（自動水栓化・温水洗浄便座導入）
・キッズスペースや授乳室のあるファミリールーム、親子で使えるファミリートイレの新設
・誰もがわかりやすい案内表示に更新

ファミリールーム
おむつ替えや授乳ができる

キッズスペース
子どもと一緒に本を読んだり休憩ができる

3 賑わいのある美術館へ

エントランス・ロビーおよびその周辺を、美術館と来館者の出会いや交流の場となる「ウェルカムゾーン」と位置づけ、統一的なコンセプトでデザインされた空間として整備しました。多くの皆さんに居心地の良い時間を過ごしていただき、美術館にまた来たいと思っていただけることを目指しています。

・ロビー内に美術や滋賀に関連した商品を提供するカフェ＆ショップを配置
・ロビーをはじめ館内各所、エントランス前にゆっくり休憩していただける椅子やテーブルを設置
・様々な交流が生まれる小規模な展示・イベントに活用できるラボ（多目的スペース）やボランティア活動室の新設
・県内作家等が小規模な展示を行うことができるポップアップ・ギャラリーの設置
・公園との空間の連続性を確保して公園利用者を美術館にいざなうために、エントランス前の植栽を芝生化

エントランス
カフェ＆ショップやテーブル、椅子が配置

エントランス前
外にもベンチやテーブルを配置し、イベントの開催も予定

4 人と作品の安全を守る

・万一の場合も作品を守るガス消火設備を各展示室に導入
・エントランス・ロビー天井の耐震化
・屋根の防水対策工事
・老朽化した空調機器（冷却塔等）の更新
・防火シャッターの改修

5 イメージしやすい名称に変更

今回のリニューアルにあたり、部屋や場所の名称を、よりイメージしやすく、分かりやすいものに変更しました。

常設展示室１		展示室１
常設展示室２		展示室２
企画展示室		展示室３
休憩ロビー	→	ソファのある部屋
中庭		コールダーの庭
屋外展示場		彫刻の庭
ミニギャラリー		ポップアップ・ギャラリー
講堂		木のホール

6 施設と改修工事の概要

＜施設概要＞
開館時期：昭和59年(1984年)8月（竣工：昭和58年(1983年)10月）
施設構造：鉄筋コンクリート（一部鉄骨造）地上２Ｆ、地下１Ｆ
施設規模：延床面積 8,544.43㎡　建築面積 6,772.73㎡
主な施設：展示室（３室　計1,765㎡）、収蔵庫（３室　計 849㎡）
　　ギャラリー(478㎡)、木のホール、ワークショップルーム、事務室 等

＜改修工事概要＞
工事期間：令和2年（2020年）3月～令和3年（2021年）5月
工事金額：1,112,287千円（改修工事費のみの金額）
　設 計　：滋賀県土木交通部建築課／株式会社岩佐建築設計事務所
　施 工　：建築工事　　杉橋建設株式会社
　　電気設備工事　ニシデン・三協建設工事共同企業体
　　機械設備工事　アマナエレン株式会社

新VI
（ビジュアル・アイデンティティ）

Shiga Museum of Art
滋賀県立美術館

これからの美術館を表現する
VI、グラフィックサイン計画　UMA/design farm

美術館の大きな屋根のような三角を組み合わせ、「M」「S」のかたちをつくり、地域や現場にとびこみ、とびたっていく様子をかたちに表現しました。様々な人と手をとり、広くコミュニケーションをとっていく姿を表しています。

メインビジュアル

滋賀の美しさに改めて出会う
メインビジュアルデザイン　UMA/design farm

滋賀県出身の写真家 川内倫子さんに撮影いただきメインビジュアルに使用しています。
生まれ変わる美術館のイメージをもとに、植物、鳥、湖など自然の中にある、小さくも健気な生命の存在を感じさせる写真は、滋賀県内の様々な場所で撮影されました（左は醒井（さめがい）の梅花藻）。
「はじめまして、滋賀県立美術館です。」というコピーは、ディレクター自らによるものです。

ウェルカムゾーンのデザイン・什器等の紹介

デザイン統括、内装設計　graf ／ サインデザイン　UMA/design farm

エントランス

キッズスペース

ウェルカムゾーンにはカフェ＆ショップを用意しました。2階には、キッズスペースそして授乳室のあるファミリールームを新設。また、ベンチが回廊や展示室にも置かれ、これまでよりもずっと居心地のよい美術館になりました。照明やベンチ、カフェ＆ショップのタイル、案内サインには、信楽を拠点にするNOTA&designが特注で製作した信楽焼を使用し、滋賀のものづくりを館内のさまざまなところで感じられる構成になっています。

2021年度展覧会プログラム
（企画展）

河野愛《こともの foreign object 》(仮) 2021年

企画展1

「Soft Territory かかわりのあわい」
2021年6月27日（日）– 8月22日（日）

休館中に長浜市黒壁スクエア、高島市泰山寺野、東近江市能登川で開催した「滋賀近美アートスポットプロジェクト」。これまでプロジェクトに参加した9 名に新たに3 名を加え、12人の滋賀にゆかりある若手作家が、「コミュニケーション」をキーワードに新作を制作し、美術館全体をつかって展覧会を開催します。ガラスや石、糸や写真など、枠に囚われない様々な表現が展開されます。

企画展2

「リニューアル記念コレクション展 回って遊ぶ声」
2021年9月18日（土）– 11月14日（日）

約1800件の収蔵品から選りすぐった作品たちをジャンルの別なく紹介する、回遊式の美術館を舞台にした展覧会です。作品をよく見ることは、作品が持つ「声」に耳を澄ますことと似ています。本展では 田村友一郎(1977-)、中尾美園(1980-)、dot architectsを迎え、従来のものの見方を飛び越え様々な空白を埋めていく方法を、声を聞くことをキーワードに模索します。

イケムラレイコ《思考》1985 年　滋賀県立美術館蔵
©Leiko Ikemura and VG Bild-Kunst 2021

澤田真一《お面》2014 年
滋賀県立美術館蔵

企画展3

「アール・ブリュット関連企画展（仮）」
2022年1月22日（土）– 3 月27日（日）

時流にとらわれず、つくりたいからつくるという真摯な欲求に基づき、独自の方法論で生み出された作品、それがアール・ブリュットです。本展には、すでに国内外で知られる澤田真一、古久保憲満、井村もも か、藤岡祐機に加えて、鵜飼結一朗など近年注目を集める作家が出品。多様な作品を楽しめるだけでなく「なぜ人はつくるのか」という根源的な問いを考える場となります。

2021年度展覧会プログラム
（常設展・県展）

常設展

「ひらけ！温故知新
― 重要文化財・桑実寺縁起絵巻を手がかりに ―」
2021年6月27日(日) – 8月22日(日)

《桑実寺縁起絵巻》(重要文化財、近江八幡市・桑實寺蔵)は絵巻の宝庫である滋賀県が誇る名品のひとつであり、特に下巻第一段(7月27日-8月9日展示予定)のパノラマ描写は室町絵巻の中でも白眉の出来です。本展ではこの作品を導き手として「パノラマの視点」「ストーリーを描く」「祈りの情景」の3つの観点から当館の収蔵品を紹介します。

重要文化財《桑実寺縁起絵巻 》(二巻) 詞:後奈良天皇・青蓮院尊鎮・三条西実隆、絵：土佐光茂、天文元年(1532年)、近江八幡市・桑實寺蔵(京都国立博物館寄託)
上巻第二段(部分)(6月27日-7月11日展示予定)

野口謙蔵《五月の風景》1934年 滋賀県立美術館蔵

常設展

「野口謙蔵生誕120年展」
2021年12月7日(火) – 2022年2月20日(日)

滋賀県蒲生郡(現・東近江市)出身の 野口謙蔵(1901-1944)は、東京美術学校(現・東京藝術大学)で 洋画を修めると故郷に戻りますが、その作品には時に「近江野謙 (おうみのけん)」とサインするほど、終生近江の風景を愛し、描き続けました。生誕120年の節目の年にあたり、本展では収蔵品と地域に伝わる関連資料を中心に紹介します。

常設展

「昔の滋賀のくらし」
2021年12月7日(火) – 2022年2月20日(日)

郷土ゆかりの作家が手がけた風俗画や風景画の中には、当時の人々の生活文化が描かれていることがあります。例えば沢宏靭《牟始風呂》には、滋賀県に伝わっていた一種のサウナ風呂や様々な風習が正確に描き込まれています。本展では明治 、大正、昭和期に制作された絵画作品や民俗資料をもとに 、今では珍しくなった滋賀の暮らしを紹介します。

沢宏靭《牟始風呂》1933年
滋賀県立美術館蔵

県展

「 第75回滋賀県美術展覧会」
2021年12月9日（木） – 12月22日（水）

75年の歴史を持つ県展。工芸・書道部門と平面・立体部門の2期に分けて展示します。

滋賀県立美術館PV

#1 アニメーション

今回のリニューアルに際し、滋賀県出身の音楽家・世武裕子さんに新しくなる美術館をイメージしたテーマ曲をつくっていただきました。軽快で何かが始まる予感に満ちた音楽にのせて、「かわる かかわる ミュージアム」というコンセプトを伝えるユニークなアニメーション映像を制作しました。新しくなった内装や什器、サインが登場するほか、躍動的に飛び出していこうとする美術館の姿勢や、訪れる人が体感できる居心地の良さ、ワクワクする感情を表しています。

ティザーサイトよりご覧ください。
https://www.shigamuseum.jp/movie/

楽曲

世武裕子
映画音楽作曲家・演奏家
近年の主な映画作品『日日是好日』『星の子』『生きてるだけで、愛』『ロマンスドール』『風の電話』『Arc アーク』(本年度6月25日公開予定)
個人作品:Raw Scaramanga
編曲・演奏など:Mr.Children、森山直太朗、LiSA

映像ディレクション

外 売募 / Guy Buybo
京都在住の映像編集者。主に広告、ミュージックビデオ、短編のドキュメンタリーを制作。目的に応じてアニメーションやCGを駆使し、映像表現を探求している。
https://www.guybuybo.co/

アニメーション

イシベノリコ / Ishibe Noriko
京都府在住。2010年京都精華大学デザイン科を経て、2016年イギリス University for the Creative Arts,BA(Hons)Animationコース卒業。フリーランスにて映像作家・イラストレーターとして国内外にて活動中。
https://norikoishibe.com/

オンライントークイベント　第2弾｜川内倫子×保坂健二朗

今回のリニューアルにあたり、メインビジュアルを撮影いただいた写真家の川内倫子さんをお招きいたします。ご自身の出身地でもある滋賀とのかかわりやこれまでのお仕事、梅花藻や座禅草などのメインビジュアルを撮影した際のエピソード、そして東京オペラシティアートギャラリーと当館、他数館で数年後に計画している個展に関して、当館ディレクターとの対談形式でお話いただきます。

＊このトークは美術館と同じ「びわこ文化公園」内にある茶室「夕照庵」で収録しています。

日時　2021年4月14日（水）19時－2021年6月27日（日）19時
開催時間になりましたらティザーサイトよりご覧ください。
https://www.shigamuseum.jp/pre-event/

登壇者

川内倫子	写真家
保坂健二朗	滋賀県立美術館ディレクター（館長）
荒井保洋	滋賀県立美術館学芸員／ファシリテーター

川内倫子

保坂健二朗　撮影：木奥恵三

荒井保洋

川内倫子
1972年、滋賀県生まれ。写真家。2002年『うたたね』『花火』で第27回木村伊兵衛写真賞受賞。2009年に第25回ICPインフィニティ・アワード芸術部門を受賞するなど、国際的にも高い評価を受け、国内外で数多くの展覧会を行う。主な個展に、2012年「照度 あめつち 影を見る」東京都写真美術館、2016年「川が私を受け入れてくれた」熊本市現代美術館など。今年6月に『Des oiseaux』をHeHeより刊行予定。

滋賀県美メンバーズ

年間パス会員制度「滋賀県美メンバーズ」がスタートします

美術館に何度も足を運び、気軽に楽しんでいただけるよう、お得な年間パス会員制度「滋賀県美メンバーズ」を新たに始めます。

年会費：一般／2,400円　高校・大学生／1,500円　小・中学生／1,000円

・有効期限（1年間）内は常設展、企画展を何度でも観覧いただけます
・美術館から定期的にチラシ等の情報をお届けするほか、講座やツアーの優先参加等の特典もあります。
・入会のお申し込みは館内受付まで（申込開始は6月27日から）

デザインチーム　プロフィール

デザイン統括、設計、広報

graf

大阪を拠点に家具の製造・販売、グラフィックデザイン、スペースデザイン、プロダクトデザイン、コミュニティデザイン、カフェの運営や食や音楽のイベント運営に至るまで暮らしにまつわる様々な要素をものづくりから考え実践するクリエイティブユニット。地域のブランディングなど新たな活動領域を開拓している。2020年、オフィスを改装した宿泊できるオルタナティブスペース「graf porch」をオープン。

グラフィック、サイン計画、VI

UMA/design farm

2007年、原田祐馬により設立。大阪を拠点に文化や福祉、地域に関わるプロジェクトを中心に、グラフィック、空間、展覧会や企画開発などを通して、理念を可視化し新しい体験をつくりだすことを目指している。「ともに考え、ともにつくる」を大切に、対話と実験を繰り返すデザインを実践。現在のメンバーは、原田祐馬、山副佳祐、西野亮介、津田祐果、平川かな江、岸木麻理子、高橋めぐみ、田中千晶の8人。受賞歴はグッドデザイン賞2016・金賞、日本サインデザイン賞最優秀賞、日本タイポグラフィ年鑑ベストワーク、CSデザイン賞準グランプリなど。

WEBディレクション、制作

石黒宇宙（gm projects）

2005年からgrafのアート、音楽、カルチャー全般を扱う部署graf media gmに所属。株式会社bluemarkでのインターンを経て、現在はgm projectsに所属、ウェブサイトのディレクション、デザイン、制作を中心に活動。近年手掛けたプロジェクトはヴァンジ彫刻庭園美術館、ベルナールビュフェ美術館、kudos、蓮沼執太フィル、NEWSANDO、無形にふれる（POLA伝統文化振興財団40周年記念展覧会）など。